

## 船井情報科学振興財団留学報告書

### 第六回

Department of Economics, Northwestern University

村上愛

記録的な早さだったそうですが、今年は 11 月にして氷点下 10 度前後を記録しました。季節外れの吹雪に見舞われた先日、博論のプロポーザルを発表する機会がありました。実は、私の所属する Northwestern University の経済学の博士課程では 3 年生の秋と春に 2 回、博論のプロポーザルを発表する機会があります。ただ、1 回目の秋の発表では、あくまでプロポーザルという位置づけなので、しっかりした研究結果を出すことはそこまで要求されていません。そのため、研究テーマに発展性があるかなど、テーマ選びそのものが重視されていると言われていました。

しかし、博論のテーマを発表するのも重要なが、この発表の機会は指導教員を選ぶための重要な過程ともとらえることができます。実は、博論のプロポーザルを発表する際、最低 2 名の教員を招待することになっています。誰を呼び、どういうテーマを語るのか、その組み合わせがポイントになるというわけです。

そもそも、私のいるプログラムではまだ正式な指導教員を決めていません。書類上正式に決まるのは 3 年生の最後になります。つまり、一通り博論のプロポーザルを発表した後に指導教員を決めるという仕組みになっているわけです。1 つの理由として経済学では基本的に研究を個人単位で行っている点が挙げられると思います。研究が個人単位のため、かならずしも指導教員と同じテーマを研究する必要はありません。それどころか、指導教員の研究テーマにあまりに直結した研究テーマを博論で選ぶと、オリジナリティがないということがかえって悪い評価にもなりえるといわれています。指導教員となりうる教員を探し出し、その教員の興味関心に沿いつつも二番煎じにならない新しい研究テーマを提案する、そのために 3 年生の一年間を使うといっても過言ではありません。

もちろん指導教員と研究テーマの組み合わせを探索する作業は突然 3 年生から始まるわけではありません。私の知る限り、ほとんどの学生は 2 年生の時に選択した専門分野の授業から候補を絞り込んでいくようです。実際 2 年生向けの授業では成績評価の一環として term paper や研究プロポーザルを提出させるものが数多くありました。それだけでなく、教員とアポイントメントをとれば直接研究テーマを話に行く機会も設けてもらえます。いわば、ショッピングは 2 年生から始まっているとも言えるわけです。

私自身は授業や個別のアポイントメントを通じて、2 年生の間に全部で 4 つの異なる研究テーマのアイデアを用意し、それぞれを異なる教授の前で説明しました。最初の 2 回は惨憺たるものでした。教員の関心を誤解し、全く興味を持ってもらうことができませんでした。3 回目は、面白いかもしれないが具体的な発展性が見込みにくいという指摘を受けました。4 つ目のアイデアは 2 年生の学期も終わるころ経済史をご専門にされている Mokyr 先生に相談しました。幸いこの 4 つ目のアイデアが面白くなりそうだということで、現在は Mokyr 先生の指導のもと研究テーマをどう設定するのかまだまだ案を練り続け

ています。まだまだ萌芽の状態のためこちらで報告できるほどの研究内容はありませんが、このまま順調にいけば、3年生の終わりには Mokyr 先生に指導教員をお願いしようと考えています。

Mokyr 先生は 1974 年に Yale 大学で経済学の博士号を取得され、同年から現在に至るまで Northwestern 大学で教鞭をとられています。主な研究分野の一つに、産業革命期における科学技術の発展をもたらした社会的、経済的要因の分析が挙げられます。2002 年から 2003 年にかけては Economic History Association の President も務められました。これまで 45 年の間、多くの学生を育ててこられました。学生への指導も熱心なことで知られています。かつての教え子の方々の活躍も目覚ましく、例えば現在 Stanford 大学に所属されている Greif 先生と Abramitzky 先生なども Mokyr 先生のかつての教え子でした。

新しい研究の案となると、たとえ学生の話であっても目を輝かせて聞いて下さる Mokyr 先生の下でなら今後博士課程が終わるまでの数年間も存分に研究ができそうだという予感がしています。今後、まずは春に行われる 2 回目の研究テーマの発表に向けて着々と具体的な研究に着手していくことになります。駆け出したばかりではありますが、いよいよ研究生活が始まるのだと思うと嬉しくなりません。